「学生指導マニュアル」を使用した実習指導の効果

山 田 正 実
岡 村 典 子[1)]、高 橋 玲 子[1)]、土 沢 千 賀[1)]

新潟県立看護短期大学
新潟県立中央病院[1)]

The Effectiveness of the Practicum Guidebook for Nursing Students and Instructors

Masami YAMADA
Noriko OKAMURA[1)], Reiko TAKAHASHI[1)], Chika DOZAWA[1)]

Niigata College of Nursing
Niigata Prefectural Center Hospital[1)]

Summary The purpose of this study was to develop the practicum guidebook and evaluate its effectiveness related the instructional skills of staff nurse instructors in the acute care nursing practicum at the urology and otorhinolaryngology unit. The practicum guidebook, a B6-size booklet, was developed based on the students' learning outcomes to cover their leaning contents categorized by medical diagnoses and treatments. The staff nurse instructors were asked to evaluate the effectiveness of the practicum guidebook using the same questionnaires in pre- and post-implementation phases. The nursing students were asked to evaluate its effectiveness in post-implementation phase.
Significant improvements were found in the following three items related to the attitudes of the staff nurse instructors : "To demonstrate my nursing skills to the students with supplemental explanations"; "to support the students' thinking and planning process"; and "to assist the students' implementation of nursing skills." The qualitative findings of the nursing students' responses included their positive and responses such as the usefulness of the practicum guidebook to understand the direction and focus of the clinical practicum. The practicum guidebook improved several areas of attitudes of staff nurse instructors. Implications of further study include: modifications and refinement of the practicum guidebook, practicum program, and the design of the study.

要 約 学生指導マニュアルを作成し、成人看護学実習Ⅰ（急性期）泌尿器科耳鼻咽喉科病棟において、看護婦と学生に使用することを試みた。学生指導マニュアルは、学習目標に基づいて疾患別（術式別）に学習内容を項目化したB6サイズの冊子である。

このマニュアルの指導上の効果を知るために、看護婦の指導技術の自己評価をアンケートにより調査した。その結果、指導技術の「自分の技術に説明を加えて見学させる」「学生の考えや計画を支持する」「ケア実施に関して支持する」が、マニュアル使用前と比較して、他の指導技術よりも高い得点の伸びを示した。学生からは、実習の方向性をつかむことに役立ったという反応も得た。

Key words: 臨床看護学実習（clinical nursing practicum）
指導技術（instructional skills）
看護学生（nursing students）

I はじめに

本学では平成 8 年度より各論看護学実習を開始した。成人看護学実習Ⅰ（急性期看護）は、新潟県立中央病院の外科系の4つの病棟において、3 週間の実習を行なっている。病棟の実習指導体制は、3 名前後の臨床指導者が配置され、患者受持ちを兼務して実習指導にあたっている。専任の臨床指導者の役割ではない。そのため、受持ち患者の看護について直接学生の指導にあたるのはスタッフ看護婦であることが多い。

急性期の看護は、病日により観察内容やケア内容が刻々と変化するので、毎日の適切な指導が重要となる。しかし、看護婦の経験の違いや指導力の差によって、学生に対する指導の内容にも差が出てくる。学生が臨床で遭遇する状況は、多様で未経験のことである。看護を行なう看護婦の姿を前にして、そこで説明や示唆、看護婦とともに技術を実施してみるといった関わりが持たれなければ、ただの見学に終わってしまう。目の前で展開される看護は単なる映像で、理解が深まることもなければ質問もできない。臨床実習という学習活動は活性化しない。このような状況が、少なからず実習現場にはあるのではないだろうか。指導する側の看護婦も、学生にどう関わるべきなのか、指導技術を持ち合わせていない場合も多いと思われる。現実に「どんな指導をしたらよいのかわからない」といった声も聞かれる。また、実習指導要項は準備されていても、ファイルに綴じられたものは指導の場面では即座に利用されているとは言い難い。

今回、実習病棟の一つである泌尿器科耳鼻咽喉科病棟において、直接学生指導にあたる看護婦のために、実習の経過をふまえて、その日の学生指導の一助となることを目的に学生指導マニュアルを作成し、使用してみた。このマニュアルは、実習目標を達成するための実習指導要項の実習内容を細項目化し、疾患別・術式別に冊子にしたもので、学生個々に1冊を準備した。また、指導の方法を示した。この学生指導マニュアルを使用したことでの指導上の効果を報告する。

II 学生指導マニュアル

1．特徴

- 実習指導要項の学習目標①手術を受ける患者を理解することができる②手術が最良の状態で受けられるよう治療的環境を整えることができる③術後の患者の状態を理解し、援助することができる④患者が安全安楽に回復を迎えられるよう援助できる、に合わせ、各疾患別（術式別）に①入院から術前②手術当日から急性期③回復期の各期に分け、冊子に組んだ。
- 治療状況（術前検査と処置、術後の治療と処置・検査など）と看護（術前アセスメント、不安への援助、術後の観察、苦痛の緩和、離床援助、日常生活援助、退院指導など）を内容として項目化した。
- 冊子の大きさを、より手近に使用できるように看護婦のポケットに入る B6 サイズとした。
- それぞれの指導については、①知識を確認するために質問をしてみる②看護婦とともに看護技術を実施してみる、とその方法を示した。

2．内容

学生が受け持つ事例の疾患（前立腺肥大症、腎腫瘍、真珠腫、慢性副鼻腔炎、声帯ポリープ、尿道腫瘍、膀胱腫瘍など）・術式（ＴＵＲ－Ｐ、腎臓摘出術、鼓室形成術、マイクロラリンゴ、鼻内内視鏡手術、尿道再建術など）別に、実習指導要項の学習内容に照らし合わせ作成した。作成したマニュアルは以下である。

① ＴＵＲ－Ｐを受ける患者の看護
② 腎臓摘出術を受ける患者の看護
③ 鼓室形成術を受ける患者の看護
④ マイクロラリンゴを受ける患者の看護
⑤ 鼻疾患患者の看護
⑥ 尿道再建術を受ける患者の看護

3．使用方法

マニュアルは学生が携帯し、朝の実習計画発表時に看護婦に渡す。看護婦とともに行う観察、ケアや処置を互いに確認し、看護婦は学生の実習計画とも照らし合わせて計画の調整を行なう。実習中は看護婦がマニュアルを持って学生の指導にあたり、実習終了時にその日の実習のまとめの参考とする。実習のまとめの後、看護婦はマニュアルの項目が実施されたことの印として、日付とサインを入れることにした。

教員は適宜、マニュアルに目を通し、実施されていない項目やサインをもらえなかった理由などを学

生から確認する。それによって、未体験の項目についてはその後の実習のなかで、その機会を得られるよう調整していく。

4．使用した期間と対象

- 平成8年9月に、1グループ計5名の学生と学生を受け持ち指導にあった看護婦12名
- 平成9年4月～9月に、5グループ計22名の学生と学生を受け持ち指導にあたった看護婦19名

III 学生指導マニュアルの効果

1．マニュアルが学生指導にどう生かされたか。

マニュアルが、看護婦の学生指導にどのように役立ったのかを知る一つ方法として看護婦の指導技術の変化に着目した。マニュアルには、質問事項や看

表1 アンケート①
「看護婦の臨床実習指導技術に関する調査」

学生指導について、ご自分が日頃行っていると思われる位置に　×印（線上に）をつけて下さい。

	全くしていない 0	常にやっている 10
1. 説明する		
2. 示唆する		
3. 質問する		
4. 助言する		
5. 応答する		
6. 注意する		
7. 自分の技術を見学させる		
8. 自分の技術に説明を加えて見学させる		
9. 学生に考えさせるように自分の技術を見学させる		
10. 学生の考えや計画を支持する		
11. 学生の基礎的知識を確認する		
12. 学習課題を提示する		
13. 学生の学習行動を観察する		
14. 学生の患者把握を確認する		
15. 患者把握について課題を提示する		
16. 情報を提供する		
17. ケア実施の状況を把握する		
18. ケア方法、実施について質問する		
19. ケア方法を支持する		
20. ケア実施に関して支持する		
21. ケア不足を補う質問をする		
22. ケア不足を補うためのケアを実施する		
23. 学生の学習は無視する		
24. 学習行動は無視する		
25. 指導を放棄する		
26. 非難する		
27. 実習中の学習状況を把握する		
28. 指導要請を受け入れる		

護婦と学生がともに行う看護が示されている。それらが実行されていれば、何らかの指導方法の変化があることを予想した。それとともにマニュアルの内容や使いやすさについても調査することとした。

1）調査方法と内容

(1) 以下の内容についてアンケート調査を行なった。

● アンケート①

「看護婦の臨床実習指導技術に関する調査」で、指導技術の自己評価である。（表1 看護婦の臨床実習指導技術に関する調査参照）これらの評価項目は、看護学実習展開に必要とされる一般的教授技術で、杉森[2)]が看護学実習指導論のなかで、看護教育方法の授業案作成とともに重要としている教授技術を参考にしたものである。説明、示唆、質問、応答、演示、支持、助言、注意、情報提供など28項目をあげた。

回答は、それぞれの指導技術について、まったくしていないを「0」、常にしているを「10」として、自分の指導技術のレベルを線上にチェックをつけてもらうことで表わしてもらった。線上の位置を得点とした。

● アンケート②

「指導マニュアルに関するアンケート」で以下マニュアルに関する指導項目数、指導内容、使い勝手、その効果、指導後のサインをする基準、今後も使うことについて質問した。（表2 「指導マニュアルに関するアンケート」の結果参照）

(2) 調査日および対象者

● 平成8年9月（マニュアル使用前）

アンケート①「看護婦の臨床実習指導技術に関する調査」

婦長を除く看護婦19名

● 平成9年9月（各論看護学実習終了直後）

アンケート①「看護婦の臨床実習指導技術に関する調査」

アンケート②「指導マニュアルに関するアンケート」

マニュアル使用者19名

2）アンケートの結果

(1) アンケート①の結果

いずれも、回収率100%であった。対象の背景は、平成8年マニュアル使用前は、平均年齢33.4歳で平均臨床経験年数は11.2年、平成9年9月は平均年齢31歳で平均臨床経験年数は9.5年であった。

表2　アンケート②

「指導マニュアルに関するアンケート」の結果

（看護婦）　n=19

1.指導項目数はどうか。

不足	4	多い	1
適当	12	わからない	1

2.各項目についての指導内容について（複数回答可）

不足している。	2
適当である。	6
多すぎる。	0
質問が多すぎる。	1
表現がわかりにくい。	5
指導できない内容がある。	2
指導内容がよくわかる。	3
指導内容が具体的でないため、指導しにくい。	3
各質問についての回答がわからないので、指導できない。	1
よくわからない。	0
どこまで理解できたら、あるいは実施できたらサインするのかよくわからない。	18

3.使い勝手はどうか。（複数回答可）

小さすぎる	1	字が小さい	2
適当な大きさ	15	サインしにくい	3
大きすぎる	0	わからない	0

4.どのような効果がある思うか。（複数回答可）

指導すべきことが明確で指導しやすい。	9
指導の効果はあがると思う。	3
いままでの指導と違いはない。	0
わからない	2
学生の実習状況がつかめる。	10
学生のケアに立ち会うことが増えた。	2
学生とともにケアをすることが増えた。	1
学生とのコミュニケーションがスムーズになった。	2
学生がポイントをつかんで予習している。	3

5.サインをする基準はなにか。

学生が質問に答えることができた。	13
学生とともにケアや観察を実施した。	12
学生の求めに応じて	3
指導内容について説明をして、学生が理解を示した。	6

6.今後も使うことについてどう思うか。

とても負担である。	1
指導内容はわかっているので使う必要はない。	0
指導内容が明確になるので使いたい。	14
サインは必要ない。	1
項目、内容を今一度検討してほしい。	3
その他（チェックだけでよい。）	1

表3 アンケート①の結果
看護婦の臨床実習指導技術の自己評価

指導技術	平成8年使用前 n=19		平成9年9月 n=19	
	平均	SD	平均	SD
説明する	**6.09**	1.95	**6.93**	2.00
示唆する	**4.38**	2.55	**5.07**	2.41
質問する	**4.65**	2.23	**5.83**	2.20
助言する	**5.37**	2.15	**5.84**	2.53
応答する	**5.79**	2.29	**7.08**	2.19
注意する	**4.16**	3.02	**3.66**	2.97
自分の技術を見学させる	**4.32**	1.88	**5.26**	2.98
自分の技術に説明を加えて見学させる	**3.59**	2.36	**5.51＊**	2.78
学生に考えさせるように自分の技術を見学させる	**3.32**	2.60	**3.84**	2.73
学生の考えや計画を支持する	**4.78**	2.69	**6.53＊**	2.27
学生の基礎的知識を確認する	**5.26**	2.14	**5.53**	2.11
学習課題を提示する	**4.07**	3.08	**4.32**	2.82
学生の学習行動を観察する	**4.57**	2.42	**4.27**	2.03
学生の患者把握を確認する	**4.5**	1.77	**5.46**	2.34
患者把握について課題を提示する	**4.44**	2.82	**4.52**	2.48
情報を提供する	**6.09**	1.47	**6.63**	1.53
ケア実施の状況を把握する	**4.99**	1.90	**5.54**	1.89
ケア方法、実施について質問する	**5.35**	2.18	**5.83**	1.95
ケア方法を支持する	**5.28**	2.14	**5.32**	2.40
ケア実施に関して支持する	**4.14**	2.11	**5.76＊**	2.09
ケ不足を補う質問をする	**4.25**	2.24	**5.03**	1.89
ケア不足を補うためのケアを実施する	**4.24**	2.72	**5.38**	2.50
学生の学習は無視する	**1.89**	2.80	**0.83**	1.59
学習行動は無視する	**1.62**	2.67	**0.78**	1.53
指導を放棄する	**1.63**	2.04	**1.18**	2.23
非難する	**1.40**	2.42	**0.76**	1.57
実習中の学習状況を把握する	**4.02**	2.30	**4.65**	2.67
指導要請を受け入れる	**6.00**	3.00	**7.07**	2.39

＊ マニュアル使用前と比較して、得点が1.5ポイント以上あがったもの

表3「看護婦の臨床実習指導技術の自己評価」は2回のアンケートにおける、それぞれの指導技術についての得点の平均値と標準偏差である。マニュアル使用前と平成9年9月を比較すると、「注意する」「学生の学習行動を観察する」「学生の学習は無視する」「学習行動は無視する」「指導を放棄する」「非難する」はポイントを下げた。その他はすべて上がっている。1.0ポイント以上得点を上げた項目は「質問する」「応答する」「ケア不足を補うためのケアを実施する」「指導要請を受け入れる」で、1.5ポイント以上上がった項目は「自分の技術に説明を加えて見学させる」「学生の考えや計画を支持する」「ケア実施に関して支持する」であった。

(2) アンケート②の結果

回収率 100%であった。対象の背景はアンケート①平成9年9月と同様である。

指導項目数は「適当である」12人、「不足」4人、「多い」1人であった。マニュアルの使い勝手は「適当な大きさ」15人、「サインしにくい」3人、「字が小さい」2人、「小さすぎる」1人であった。指導内容については、「どこまで理解できたら、あるいは実施できたらサインするのかよくわからない」18人、「適当」6人、「表現がわかりにくい」5人、「指導内容がよくわかる」「指導内容が具体的でない」各3人、「不足」「指導できない内容がある」各2人、「質問が多すぎる」「各質問の回答がわからないので、指導できない」各1人であった。マニュアルの効果については、「学生の実習状況がつかめる」10人、「指導すべきことが明確で指導しやすい」9人、「指導の効果はあがると思う」「学生がポイントをつかんで予習している」各3人、「学生のケアに立ち会うことが増えた」「学生とのコミュニケーションがスムーズになった」「わからない」各2人、「学生とともにケアをすることが増えた」1人であった。サインする基準については、「学生が質問に答えることができた」13人、「学生とともにケアや観察を実施した」12人、「説明をして、学生が理解を示した」6人、「学生の求めに応じて」3人であった。今後もマニュアルを使うことに関しては、「指導内容が明確になるので使いたい」14人、「項目、内容を今一度検討してほしい」3人、「負担」「サインは必要ない」各1人であった。

2．学生にとって、マニュアルはどう役立ったのか。

マニュアルは、看護婦の学生指導に役立ててもらうために作成したものであるが、その内容は、学生

表4「指導マニュアルに関するアンケート」の結果（学生）n=22

1.「指導マニュアル」は学習にどのように役立ったか。（複数回答可）

予習内容の参考となった	20
得なければならない患者の情報を知るための参考になった。	19
観察ポイントが参考になった。	20
看護上の問題がつかみやすかった。	16
ケア実施上の注意点がわかった。	14
手術前後の患者の処置や看護内容がおおよそ見当がついた。	19
手術前後の患者の処置や看護内容がイメージできた。	16
よくわからない	0
学習にはあまり役立たなかった。	0
その他（行動計画、目標の参考になった。）	1

2.「指導マニュアル」は実習にどのように役立ったか。（複数回答可）

Ns とのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝに役立った。	11
Ns にサインをもらうのが面倒だった。	8
Ns に質問されるのがいやだった。	1
Ns とともにケアを実施できた。	13
Ns が不足している知識を補ってくれた。	14
Ns が重要な質問をしてくれて参考になった。	13
とくに実習には役立たなかった。	0
よくわからない。	0
その他（事前学習して実習に臨めた。）	1

3. 意見・感想（抜粋）

・患者の病日から、求められる看護が経過的に把握できた。
・実習すべき具体的内容、観察ポイントが参考になった。（2人）
・自分の不足のケア、観察を確認することができてよかった。（3人）
・おおよその看護の見当がつき、予習や実習計画の立案に役立った。（6人）
・ルチーンを理解することで、本事例に応用できた。
・看護婦からの質問に対して、準備できてよかった。
・指導内容が細かく記載されているので、看護婦に突っ込まれて質問された。
・看護婦のサインが励みになった、あるいは達成感があった。（2人）
・サインをもらう時、看護婦が忙しそうで気がひけた。
・サインをもらうことばかりが気になった。
・看護婦とコミュニケーションがとれずに困った。

の学習すべき内容であるため、学生にとっても有用な手引書となった。マニュアルの指導内容を参考に予習したり、実習計画を立ててくる学生がほとんどであった。その効果を客観的にみるために、学生にマニュアルについて調査を行った。

1）調査方法と内容、対象、調査日

平成9年9月実習終了後に、アンケート調査を行なった。質問項目は、マニュアルが学習や実習にどのように役立ったかである。（表4「指導マニュアルに関するアンケート」の結果参照」調査の対象は平成9年度3年の実習生22名である。

2）アンケートの結果

回収率100％で結果は表4に示す。

マニュアルが学習にどのように役立ったかについては、「予習内容の参考になった」「観察ポイントが参考になった」各20人、「得なければならない患者の情報を知るための参考になった」「手術前後の患者の処置や看護内容がおおよそ見当がついた」各19人、「看護上の問題がつかみやすかった」「手術前後の患者の処置や看護内容がイメージできた」各16人であった。実習にどのように役立ったかについては、「看護婦が不足している知識を補ってくれた」14人、「看護婦とともにケアを実施できた」「看護婦が重要な質問をしてくれて参考になった」各13人、「看護婦とのコミュニケーションに役立った」11人、「看護婦にサインをもらうのが面倒だった」8人、「看護婦に質問されるのがいやだった」1人であった。自由記載では、大半は学習に役立ったと書いているが、なかには「サインをもらう時、看護婦が忙しそうで気がひけた」「看護婦とコミュニケーションがとれずに困った」というものもあった。また、看護婦のサインが励みになったり、達成感につながったという学生もいた。

Ⅳ 考察

看護学実習展開に必要な一般的教授技術には演示、説明、閉じた質問、開いた質問、形式的質問を含む発問、看護ケアの不足を補うための指示、ケア実施の指示、示唆、支持、助言、情報提供、応答、指導の調整、学習行動の観察、注意などが含まれる。このほかに学生の知識の確認、患者把握の確認、学習課題の提示、学習課題の明確化、指導要請の受け入れ、学習状況の把握、看護ケア実施状況の把握、不足を補う看護ケアの実施などが含まれる[2)]。アンケート①では、マニュアル使用前後の看護婦の指導技術の変化を調査した。同一対象の比較ではないが、指導技術の傾向はうかがうことができる。

「自分の技術に説明を加えて見学させる」「学生の考えや計画を支持する」「ケア実施に関して支持する」が、マニュアル使用前の得点と比較すると、1.5ポイント以上と他の指導技術よりも比較的高く伸びている。これらの技術は授業成立場面に多くみられる典型であり[2]、望ましい変化と言える。また逆に、授業未成立場面の典型である「学生の行動は無視する」「学習行動は無視する」「指導を放棄する」「非難する」は得点を低めており、看護婦が学生指導へ関心を向けてきたことが読み取れる。

「学生の考えや計画を支持する」が得点をあげたことは、看護婦と学生の間のコミュニケーションあるいは指導調整の深まりの一端を示すものと推測される。学生は、マニュアルの学習上の効果として、「予習内容の参考にした」「必要な患者の情報を知るための参考になった」「処置や看護内容のおおよその見当がつけられた」とあげている。これらが、実習計画にもある程度反映され、看護婦と学生が同じ看護を目標としたことで、その日の学生の実習目標と看護婦の指導目標が一致し、授業成立へと発展させることができたのではないかと考える。しかし、コミュニケーションに関しては、アンケート②で「学生とのコミュニケーションがスムーズになった」と回答したものが、わずか 2 人であった。一方、学生からの反応では、半数が看護婦とのコミュニケーションに役立ったとしている。これらの結果が示すことは、看護婦がもともと学生とのコミュニケーションの不足や難しさを感じていなかったのか、あるいは意識されていなのかなどは不明である。

マニュアルには、学生に質問をして知識の確認をしてほしい項目や看護婦とともに実施する項目がわかりやすく示されている。「自分の技術に説明を加えて見学させる」「ケア実施に関して支持する」「質問する」「応答する」は 1.0 ポイント以上得点が上がっており、具体的に指導方法を示したことが、多少なりとも指導に生かしてもらえたのではないかと考える。とくに「自分の技術に説明を加えて見学させる」が得点をあげたことは、今後の実習指導に期待が寄せられる。看護婦に指導してもらいたいのは具体的な看護場面の看護技術である。しかし場面を見せるだけでは、映画やビデオを見せることと変わらない。そこには、必ず説明や質問のやり取りといった関わりが必要である。看護婦には、これまでの豊富な経験がある。看護技術に関する場面は、自信をもって学生に見学させたり、ともに実施してほしいと考える。

アンケート②の結果では「指導すべきことが明確で指導しやすい」、今後においては「指導内容が明確になるので使いたい」という回答が半数以上あり、マニュアルが日々の実習指導に役立てられたと考えられる。実習指導要項の学習目標を具体的な内容に項目化し、時期別・日割り別の看護の構造が具体的になったことで、指導のポイントがつかみやすくなったと考える。また、「学生の実習状況がつかめる」といった効果もあった。冊子にまとめられ、日々の看護婦のサインや日付が入るために、前日までの学生の実習内容が容易につかめる。学生の指導にあたる看護婦は、継続して担当する機会が少なく、指導が継続できないという現状がある。このマニュアルを介して、短時間に、学生のそれまでの学びをおおよそでも把握できたことは、その後の指導の関わりを深めていくチャンスになると考えられる。

指導内容についての回答でもっとも多かったのが、「どこまで理解できたら、あるいは実施できたらサインするのかよくわからない」であった。このひとつの理由としては、看護婦は学生の実習評価を臨床看護の評価という物差しで評価しようとしているところに問題がある[3]と考えられる。“できる、できない”ではなく、“なるほど、これでわかりました。なぜそうなのか、今わかりました。”という反応がかえってくることが実習評価の基準である。また、それが看護婦自身の指導の評価でもある。臨床実習指導がスタッフ看護婦に依頼されている現状のなかで、看護婦の臨床指導技術を「指導の成立」に至るよう働きかけることが必要である。看護婦は、看護の基本的なところまで（看護の意味付け）を学生に説明できなければならない。しかし実際には看護婦の指導力の差は否定できない。その解決策として、今後は指導内容のもれや落ちをなくすために、具体的な指導場面を提示していく必要がある。国立大学医療技術短期大学部看護学科協議会臨地実習委員会の臨地実習指導に関する調査によれば[1]、実習指導者の指名基準として多いのは看護婦長と副婦長であったが、実際の臨床場面で学生の指導を行なっているのはスタッフ看護婦であった。スタッフ看護婦は実習指導に関心を示しながらも、研修会などの受講経験がなく、自信のないまま実習指導を行なっていたと報告されている。当実習病棟のように臨床指導者が

業務と兼務である場合も、他のスタッフ看護婦が、患者のケアや処置の場面で学生指導に直接関わることになる。また当施設ではいままで専門学校生の実習を受け入れてはいたが、短大生の実習受け入れは平成 8 年度が最初であった。そういった意味でも、看護婦の実習指導への戸惑いは大きかったと思われる。その状況のなかでマニュアルの効果は実習のシラバスとしても機能したと思われる。

マニュアルの内容について「表現がわかりにくい」「指導内容が具体的でない」「項目・内容を今一度検討してほしい」という回答もあったので、マニュアルの指導項目の内容･表現を見直し、より使いやすいものに改善していく必要もある。また、スタッフ看護婦、臨床実習指導者、教員との連携をより深めることも大切となる。実習指導はスタッフとの共同作業であることの認識が重要である。

学生からは、マニュアルが学習や実習にとても役立ったという反応を得た。アンケート中の自由記載の感想では、看護のおおよその内容をつかむことができ、それが事前学習や実習計画に生かされたと多くの学生が書いている。また看護婦のサインが、実習の達成感や励みにもつながっている事が分かった。学習効果を上げるためには、学生の学習意欲が不可欠である。そのためには適切な学習活動を体験させる必要がある。その活動を支えるのは動機や動機づけである。アニュアルは「達成感・励み」という動機を、また「学習すべき項目とその内容を具体化する」という動機づけを学生に与えることができたのではないかと考える。しかし一方では、看護婦とコミュニケーションがうまくいかないケースや、多忙な業務をこなす看護婦に対する学生の遠慮する姿なども見られ、今後も臨床における学生指導についていっそうの理解と協力は不可欠であると思われる。また、マニュアルが単なるチェックリストにとどまることのないように、教員の関わり方も考えていきたい。

Ⅴ まとめ

学習目標に合わせて、学ぶべき治療状況や看護を項目化した学生指導マニュアルは、看護婦の学生指導についての関心や実習指導技術の得点を引き上げた。また、学生指導マニュアルは、看護婦が自身の実習指導を確認するめやすともなる。学生にとっては、事前学習や実習計画に役立てることができた。

今後は、学生指導にあたるすべての看護婦の実習指導技術を「指導の成立」に至るように、学生指導マニュアルに加えて具体的な指導方法についても準備していく必要がある。そしてスタッフ看護婦、臨床実習指導者、教員との連携を深めていくことも重要である。

参考文献

1）佐藤洋子：欠かせない、実習病院とのより一層の機能的連携、看護教育、1997、38(9)、P767～770
2）杉森みど里：看護教育学、医学書院、1995.
3）鶴田早苗：問題「実習評価の時間がない、どのように評価すべきがわからない」の支援策、看護展望、1994、19(3)、P331～333